



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	落葉集の掲出文字種について : JIS漢字との比較を含めて
Author(s)	白井, 純
Citation	国語国文研究, 120, 64(1)-53(12)
Issue Date	2002-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93731
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_120_64-53.pdf



落葉集の掲出文字種について —JIS漢字との比較を含めて—

白井 純

概要

落葉集は本篇・色葉字集・小玉篇から構成されるが、掲出文字種のうち三部に共通するものは異なり文字種で77%である。また、前二部に連れて成立した小玉篇は異なり文字種で全体の95%以上を掲出しつつも総てを包含するものではなく、掲出しなかった文字種に基本的な文字種が複数含まれる。したがって小玉篇は、前二部の成立後に改めてこれを整理し増補したものではなく、前二部の編集時に想定される文字種の集合から直接成立したと考えられる。

実用性を重んじた落葉集の掲出文字種は、第一・第二水準のJIS漢字によって異なり文字種で93.6%が表記可能であり、JIS漢字の文字種に比して大きな差異はみられない。第三・第四水準のJIS漢字を考慮すると新たに36文字種が表記可能となることからみて、JIS漢字の表現力は落葉集に於いても有効であり、実用的な文字種に大きな相違がないことが確認される。

1 はじめに

落葉集の研究は、諸本の対校など文献学的側面から詳細に考察した土井忠生の研究¹が知られ、総合的な研究として高い水準にある。したがって、落葉集の掲出文字種に関しては本稿の結論もこれを追認するものであるが、悉皆調査によることで、これまで推定に止まっていた諸点をより明らかにし得たと考えている。本稿に関連するその他の研究には、森田武が本篇の掲出文字種の排列について、これが基本的にアルファベット順にあることを指摘した研究²や、山田俊雄が小玉篇の重複掲出について調査した研究³がある。また小島幸枝が総索引を作成する⁴に及んで、使用上の便宜は格段に向上している。

本稿は以上を踏まえ、落葉集⁵全体を三乃至四部に分け、各部に掲出される文字種を総て調査することにより、落葉集内部における本篇・色葉字集・小玉篇相互の役割を位置づけると共に、小玉篇の成立過程について検討したものである。また落葉集全体を電子テキスト化する際に問題となるJIS漢字の表現力について、新たに第三・第四水準も考慮しつつ報告したい。

2 落葉集に掲出された文字種

2.1 凡例

本調査では、色葉字集の附録である官職名と国名、小玉篇の目録の各部分を除き、その他少数ではあるが、題字や違字集にある丁数を示す文字も除いている。また、漢字として本文中に表記する際に、JIS漢字の字体と落葉集に掲出された字体が一致していれば後ろにaを、一致しないが異字体関係と認められればvを(異字体関係が複数みられるのでv1, v2とする)、異字体関係も含

¹土井忠生『吉利支丹語學の研究』靖文社 1942 (→同『吉利支丹語學の研究新版』三省堂 1971) を参照。

²森田武 1953『落葉集本篇の組織について』『国語学』13-14 (→同『室町時代語論攷』三省堂 1985 所収) を参照。

³山田俊雄 1970『落葉集小玉篇に見える漢字字体認識の一端』『国語学』84 を参照。

⁴小島幸枝『耶蘇会板落葉集総索引』笠間書院 1978 を参照。

⁵落葉集には数種の諸本が知られているが、ここではイエズス会ローマ本部文書館蔵本の影印(小島幸枝『耶蘇会板落葉集総索引』笠間書院 1978 所収)を用いた。

めて JIS 漢字になれば n を付して区別している (角括弧内の 5 桁の番号は大漢和番号あるいは、これを拡張した文字鏡番号であるが、見出されない文字種については [xxxxx] とする)。但し、行草体特有の省略によって字体を判断できない場合は一致するものと判断している⁶ため、厳密な意味で字体の相違を問うには不向きであることは否めない。よって、この分類については JIS 漢字と比較する箇所でのみ詳しく検討するに止めるが、例を挙げて示せば以下の如くなる。

1. **囀** は囀であり、字体も一致するので囀 a とする。
2. **乃** は行草体特有の省略が甚だしく、字体について判断できないため道 a とする。
3. **隄** は「陰」の異字体と判断されるため陰 v1[41735] とする (異字体が 2 種類以上ある場合は v1, v2... とする)。
4. **悵** は異字体関係を合せて JIS 漢字では表記できないため、n[05095] とする。

逆に言えば、異字体であるという認定は、それが文字形態として確実に表現されている場合に限ることになる。また、活字を用いた為か、意図的に掲出する場合や若干の誤用と思しき例を除いて字体のゆれは少ないが、異字体関係にある文字種が 12 組 142 字ある (括弧内は延べ字数。以下同じ)。

形 (18) — 𪛗 (9), 寂 (5) — 𪛗 (2), 𪛗 (19) — 𪛗 (3), 𪛗 (5) — 悵 (3),
 濁 (5) — 𪛗 (2), 𪛗 (5) — 𪛗 (4), 泥 (13) — 𪛗 (4), 𪛗 (4) — 𪛗 (2),
 暴 (3) — 𪛗 (2), 𪛗 (12) — 𪛗 (3), 𪛗 (11) — 𪛗 (3), 𪛗 (3) — 𪛗 (2)

これらのうち、形、濁、低、翼については色葉字集や小玉篇に連続して掲出され、編集の段階で異字体関係にあることが意識されていたと思われる。墮、泥、暴については違字集に訂正があるように、誤解による字体のゆれと考えられる⁷。

また、豊島正之が指摘しているように⁸、キリシタン文献では同一の字体で二つの文字概念を現す場合があるが、本稿では附された音訓などを参考とし、これを別文字種として扱う。

2.2 落葉集の構成

落葉集は、いろは立てで熟字のみを掲出する本篇 62 丁、いろは立てで各項目の内部に単漢字と熟字を共に掲出する色葉字集 23 丁、部首立てで単漢字を掲出する小玉篇 19 丁と若干の附録部分から構成される。また音訓両引きが可能であり、本篇は音から、色葉字集は訓から検索する仕組みになっている。これに対し小玉篇は形から引くことを意図したと言われている。

	部立て	引き方	掲出方法
本篇	いろは	音引き	熟字
色葉字集	いろは	訓引き	単漢字と熟字
小玉篇	部首	部首引き (右傍訓は音)	単漢字

小玉篇が掲出文字種の形を重んじていることは、落葉集のうち先行して成立したと考えられる本篇と色葉字集の序文に「(前略)……字の音聲を右に記し讀を左にして色葉集の跡を追ひいろはの次第をまなで以て字書をつくる仍此一冊を落葉集と号す又此書の終にハ一字一字のヨミを本としおなじく二三字の世話をも少々相加へていろはをついづる者也……(後略)」とあり、また小玉篇の序文に「右落葉集ハ字のこゑを用ひていろはをついで色葉字集ハヨミを以て記すれば讀こゑを

⁶したがって、JIS 漢字の包摂規準とは異なるゆるい規準で包摂することになる。

⁷落葉集の異字体・異字形とその掲出状況については、拙稿 2002「キリシタン文献における字体・字形の認識について——落葉集を例として——」「古辞書と JIS 漢字」第 5 号、池田証寿編、に述べたので参照されたい。

⁸豊島正之『キリシタン版ざやどべかどる本文・索引』清文堂 1987 を参照。

知て字のすがたをしらざる時の所用となすといへども文字のかたちを見て其よミこゑをしるに道なき便として右両編の内より今又此せばき玉篇をあみ畢」とあることから明らかである。但し、ここで文字種掲出の形式に着目すれば、小玉篇に先行して成立したのは、音引きで熟字掲出の本篇と、訓引きで単漢字掲出と熟字掲出を併載する色葉字集であると言える。したがって文字種掲出の形式上は、単漢字掲出(右傍訓は音)の小玉篇は、色葉字集の単漢字掲出部分(右傍訓は訓)に対応していると考えられるべきであると思われるが、これについては後で詳しく論じることとする。

2.3 異なり文字種

落葉集に掲出された異なり文字種については以下の如くである。

本篇	色葉字集	小玉篇	全体
1805	2010	2087	2182

このように、全体で 2182 文字種を掲出する。内訳としては、小玉篇が 2087 文字種と最も多くの文字種を掲出し、本篇を 300 文字種近く上回る⁹のが最大である。したがって、落葉集全体に対して小玉篇は 95.6% を掲出することになる。1805 文字種の本篇は 82.7%、2010 文字種の色葉字集は 92.1% を掲出している。

2.4 延べ字数

また、落葉集に掲出された文字種の延べ字数については以下の如くである。

本篇	色葉字集	小玉篇	全体
13874	4774	2404	21052

延べ字数では本篇が 13874 字数と落葉集全体の 65.9% を占めている。次いで色葉字集が 4774 字数で 22.7%、異なり文字種で最多の小玉篇は 2404 字数で 11.4% を占めるに過ぎない。これは、熟字を掲出する本篇では繰り返し用いられる文字種が多く(平均 7.69 回)、単漢字を掲出する小玉篇では繰り返し殆ど無い(平均 1.15 回)ことに由来する。部首立ての小玉篇に重複掲出が見られることは、同一の漢字を検索便宜上あるいは錯誤から二箇所以上の部首に配分したのであろうという指摘が既になされている¹⁰。

なお、全体をとおして多く用いられた文字種は以下の如くである。

人 a(168)、子 a(110)、中 a(98)、心 a(98)、法 a(94)、行 a(92)、日 a(87)、月 a(87)、水 a(84)、道 a(83)、上 a(81)、頭 a(80)、者 a(79)、物 a(79)、々 a(77)、所 v(71)、風 a(71)、山 a(71)、地 a(70)、事 a(69)、花 a(69)、門 a(68)、国 a(67)、言 a(67)、来 a(67)、家 a(66)、氣 a(65)、生 a(64)、書 a(62)、衣 a(60)、下 a(59)、天 a(58)、木 a(57)、学 a(56)、前 a(56)、馬 a(56)、色 a(55)、草 a(55)、年 a(52)、作 a(50)

以上の他に、おどり文字が 77 字数ある。以上の如き文字種の延べ字数が多いのは、主に熟字の二字目に多用された結果である。

2.5 各部と全体との関係

2.5.1 文字種の掲出状況

落葉集は三部構成であり、その性質はそれぞれ異なるが、三部に共通して掲出される漢字がある一方で、どれか一部にしか掲出されない漢字もある。以下に、その構成をみる。

⁹但し後に述べるように本篇の文字種を全く維持したまま 300 文字種を追加したものではない。

¹⁰土井忠生前掲書(新版)143 頁ほか、山田俊雄前掲論文を参照。

	A	B	C	D	E	F	G
本篇	○	○	×	○	○	×	×
色葉字集	○	○	○	×	×	○	×
小玉篇	○	×	○	○	×	×	○

異なり文字種 1681 64 247 47 13 18 112

三部に共通する文字種 (A 群) は 1681 文字種あり、全体の 77.0% を占めている。先に全体を通して多く用いられた文字種を挙げたが、共通して掲載される文字種についてもこれと同様である。これらは、落葉集に於いては基本的な文字種と考えてよいだろう。

人 a(168), 子 a(110), 中 a(98), 心 a(98), 法 a(94), 行 a(92), 日 a(87), 月 a(87), 水 a(84), 道 a(83), 上 a(81), 頭 a(80), 者 a(79), 物 a(79), 々 a(77), 所 v1(71), 風 a(71), 山 a(71), 地 a(70), 事 a(69), 花 a(69), 門 a(68), 国 a(67), 言 a(67), 来 a(67), 家 a(66), 氣 a(65), 生 a(64), 書 a(62), 衣 a(60), 下 a(59), 天 a(58), 木 a(57), 学 a(56), 前 a(56), 馬 a(56), 色 a(55), 草 a(55), 年 a(52), 作 a(50)

本篇と色葉字集に共通する文字種 (B 群) は 64 文字種あり、全体の 2.9% を占めている。

面 a(44), 王 a(26), 長 a(23), 民 a(20), 朝 a(20), 夢 a(18), 亡 a(16), 一 a(15), 弟 v1(14), 百 a(14), 毒 a(13), 半 a(13), 六 a(13), 魂 v1(12), 壺 v1(11), 良 a(11), 二 a(11), 十 a(11), 五 a(11), 執 v1(10), 匠 a(10), 亭 a(10), 千 a(10), 三 a(9), 形 v1(9), 四 a(9), 疑 v1(8), 且 a(8), 館 a(7), 粉 a(7), 比 a(6), 双 a(6), 艱 a(6), 八 a(6), 以 a(6), 衰 a(5), 艶 a(5), 臨 a(5), 七 a(5), 尔 a(5), 浅 v1(5), 耕 a(4), 危 a(4), 爰 a(4), 斗 a(4), 画 a(3), 閨 a(3), 植 a(3), 幾 a(3), 也 a(3), 弊 a(2), 區 a(2), 吏 a(2), 沾 a(2), 游 v1(2), 踏 v1(2), 茂 a(2), 鍛 a(2), 充 a(2), 副 a(2), 叛 a(2), 纒 v1(2), 登 a(2)

他におどり文字の 77 字数があることを除けば、これらは本篇と色葉字集には繰り返し掲出される文字種であり、その延べ字数 607 字数 (平均 9.48 回) に達していることから分かることと非常に一般的な文字種だと思われる。

色葉字集と小玉篇に共通する文字種 (C 群) は 247 文字種あり、全体の 11.3% を占めている。延べ字数 3 字以上の文字種を挙げる。

鼠 v1(10), 付 a(9), 遣 a(7), 何 a(7), 雀 a(6), 杜 a(5), 岩 a(5), 桃 a(5), 刷 a(5), 茸 a(5), 袴 a(5), 謂 a(5), 稲 a(5), 窺 a(4), 陶 a(4), 戌 a(4), 努 a(4), 宵 a(4), 李 a(4), 菅 a(4), 突 a(4), 姿 a(4), 築 a(4), 彦 v1(4), 塗 a(4), 之 a(4), 繼 a(4), 頼 a(4), 態 a(4), 徊 a(4), 捕 a(4), 鷹 a(4), 俳 a(4), 垣 a(4), 搔 a(4), 総 a(4), 蛤 a(4), 桶 a(4), 栗 a(4), 紺 a(4), 串 a(4), 楊 a(4), 敷 v1(4), 柑 a(3), 投 a(3), 餌 a(3), 付 a(3), 薨 a(3), 翼 v2(3), 恣 a(3), 欽 a(3), 某 a(3), 熾 a(3), 寅 a(3), 酉 a(3), 鞆 a(3), 嗜 a(3), 試 a(3), 摩 a(3), 杉 v1(3), 設 a(3), 燃 a(3), 申 a(3), 練 a(3), 倚 a(3), 共 a(3), 旋 a(3), 崎 a(3), 貝 a(3), 鯛 a(3), 梨 a(3), 椎 a(3), 儼 a(3), 輔 a(3), 姪 a(3), 索 a(3), 棚 a(3), 剥 a(3), 彫 v1(3), 俸 a(3), 肩 a(3), 只 a(3), 稀 a(3), 抱 a(3), 挿 a(3), 宛 a(3), 漕 a(3), 争 a(3), 狩 a(3), 拱 a(3), 忌 a(3), 綾 a(3), 咸 a(3), 尤 a(3), 房 a(3), 釘 a(3), 戾 a(3), 刳 a(3), 囚 a(3), 鯉 a(3), 熊 a(3), 脂 a(3), 鑢 a(3), 剩 a(3), 龜 v1(3), 鴨 a(3), 沸 a(3), 稠 a(3), 輿 a(3), 朽 a(3), 媚 a(3), 驪 a(3), 諺 v1(3), 又 a(3), 蹶 a(3)

以上の文字種の中には、明らかに熟字としては掲出が難しい文字種も含まれているが、それほど特殊な文字種ばかりというわけではなく、熟字として掲出することも充分可能だったと思われる。色葉字集の編集にあたって文字種を増補したということだろうか。

本篇と小玉篇に共通する文字種 (D 群) は 47 文字種あり、全体の 2.2% を占めている。

閣 a(14), 府 a(10), 鳳 a(7), 利 a(7), 尺 a(6), 詩 a(6), 辱 a(5), 髓 a(4), 帽 a(4), 丈 a(4), 披 a(4), 象 a(3), 億 a(3), 驢 v1(3), 湖 a(3), 梵 a(3), 斛 a(3), 壹 a(3), 枚 a(3), 驛 a(2), 腦 a(2), 礦 v1(2), 疲 a(2), 臍 a(2), 杷 a(2), 琶 a(2), 枇 a(2), 愬 v1(2), 琵琶 a(2), 碗 a(2), 捌 a(2), 随 a(2), 阿 a(2), 埒 a(2), 杓 a(2), 瀾 a(2), 硫 a(2), 艘 a(2), 風 a(2), 祇 a(2), 娑 a(2), 茲 a(2), 仟 a(2), 驛 a(2), 伍 a(2), 槽 a(2), 佰 a(2)

以上の如く、三部に共通する文字種が 1681 文字種で全体の 77.0%を、また二部に共通する文字種が 358 文字種で全体の 16.4%を占めており、全 2182 文字種に占める比率は併せて 93.4%に及ぶ。これ以外に、一部のみに掲出された文字種が 143 文字種で 6.6%ある。

本篇のみに掲出された文字種 (E 群) は 13 文字種あり、全体の 0.6%を占めている。
句 a(8)、泥 v1(4)、械 a(3)、九 a(3)、[10451]n(2)、奪 a(2)、卅 a(1)、卅 a(1)、點 a(1)、玖 a(1)、臙 a(1)、猓 a(1)、弄 v1(1)

うち、数詞が 3 文字種あり、これは本篇末尾の附録の扱いであるから、除外すべきかもしれない。泥 v1[104981]は色葉字集と小玉篇では泥 a で掲出される。また弄 v1 は、施されたよみの性質からみて色葉字集と小玉篇では睚 v1 として掲出されたであろうか。また句 a については句 a と混じた形跡もあり (落葉集に於いては字体上区別されない)、猓 a と墮 a とは違字集における訂正字である。さらに「ろ」の部の械 a については断簡として存する一次的印刷物以降の増補分だとも言われる¹¹など、特殊な文字種が少なからずある。これらを除くと、本篇のみに掲出された文字種は事実上数文字種に過ぎないことが分かる。つまり、本篇を色葉字集と小玉篇を併せた集合に対してした場合に、本篇に独自の文字種は極めて少ないということである。

色葉字集のみに掲出される文字種 (F 群) は 18 文字種あり、全体の 0.8%を占めている。
暴 v1(3)、斐 a(2)、召 a(2)、踏 a(2)、麵 a(2)、豕 a(2)、裸 a(1)、柴 a(1)、包 a(1)、潰 a(1)、棄 a(1)、魁 v1(1)、倅 a(1)、詰 a(1)、隋 a(1)、茹 a(1)、祢 a(1)、巳 a(1)

特殊な文字種がやや多いものの、小玉篇に掲出されなかった理由は分からない。

小玉篇のみに掲出される文字種 (G 群) は 112 文字種あり、全体の 5.1%を占めている。
戊 a(2)、宋 a(2)、炭 a(2)、汀 a(2)、榴 v1(2)、兆 v1(1)、宰 a(1)、禾 a(1)、丑 a(1)、麒 a(1)、雍 a(1)、貝 a(1)、桂 a(1)、[38702]n(1)、詰 a(1)、口 a(1)、庚 a(1)、挈 v1(1)、蠟 a(1)、广 a(1)、既 a(1)、巳 a(1)、頁 a(1)、祭 a(1)、[01507]n(1)、劇 a(1)、鉞 a(1)、監 a(1)、擊 a(1)、爰 a(1)、弼 a(1)、避 a(1)、厂 a(1)、欠 a(1)、升 a(1)、逗 a(1)、彡 a(1)、介 a(1)、イ a(1)、鞭 a(1)、薩 a(1)、繆 a(1)、鉄 a(1)、鰓 a(1)、但 a(1)、尚 a(1)、啐 v1(1)、𩚑 a(1)、𩚑 a(1)、尸 a(1)、尹 a(1)、脇 v1(1)、戈 a(1)、臚 a(1)、柘 a(1)、倉 a(1)、鴻 a(1)、槐 v1(1)、局 a(1)、饒 a(1)、涉 a(1)、湛 a(1)、冫 a(1)、紀 a(1)、烝 a(1)、岐 a(1)、亮 a(1)、刺 a(1)、史 a(1)、鮎 a(1)、罔 a(1)、幡 a(1)、[39974]n(1)、廷 a(1)、按 a(1)、磔 a(1)、處 a(1)、蹴 a(1)、佑 a(1)、襦 a(1)、鶯 a(1)、鶯 a(1)、陵 a(1)、獅 a(1)、卜 a(1)、煮 v1(1)、隼 a(1)、鞠 a(1)、鞫 a(1)、庫 a(1)、尉 a(1)、鴉 a(1)、牡 a(1)、[11742]n(1)、稅 a(1)、祐 a(1)、淤 a(1)、鱗 a(1)、鯁 a(1)、鰲 a(1)、隅 a(1)、[22015]n(1)、惻 a(1)、犁 a(1)、鮐 a(1)、韻 a(1)、駿 a(1)、擊 a(1)、刂 a(1)、砥 a(1)、蜜 a(1)、佳 a(1)

全体の傾向として、やや特殊な文字種が多いことが特徴として挙げられる。また、各部首をあらわす文字種が少なからずあるのは、部首立ての構成に拠る小玉篇特有の事情を考慮すべきである。

また、参考までに延べ字数の分布を示しておく。

	A	B	C	D	E	F	G
本篇	○	○	×	○	○	×	×
色葉字集	○	○	○	×	×	○	×
小玉篇	○	×	○	○	×	×	○
延べ字数	19444	607	679	151	29	25	117

先に指摘したとおり、本篇と色葉字集に掲出され小玉篇に掲出されない文字種 (B 群) の延べ字数が、文字種が少ないにもかかわらず多いことは、他に比べても特徴的である。この点については次節で考えることにしたい。

¹¹ 土井忠生前掲書 (新版)154 頁参照。

2.5.2 小玉篇の成り立ち

小玉篇は、本篇と色葉字集の成立に少し遅れて成立したと考えられている¹²。このこと自体は、落葉集の装丁や序文から判断しても明らかだが、ここで掲出文字種からこの問題について検討してみたい。

本篇と色葉字集は、独占的に掲出する文字種がそれぞれ 13 文字種、18 文字種と少ないが、小玉篇は 112 文字種と他に比して多くなっている。一方、小玉篇は落葉集全体の 95.6% の文字種を掲出するものの、本篇と色葉字集に共に掲出されながら小玉篇に掲出されない文字種も 64 文字種あることを前節で指摘した。延べ字数の多いものを再掲すれば以下の如くである。

面 a(44), 王 a(26), 長 a(23), 民 a(20), 朝 a(20), 夢 a(18), 亡 a(16), 一 a(15), 弟 v1(14), 百 a(14), 毒 a(13), 半 a(13), 六 a(13), 魂 v1(12), 壺 v1(11), 良 a(11), 二 a(11), 十 a(11), 五 a(11), 執 v1(10), 匠 a(10), 亭 a(10), 千 a(10), 三 a(9), 形 v1(9), 四 a(9), 疑 v1(8), 旦 a(8), 館 a(7), 粉 a(7), 比 a(6), 双 a(6), 艱 a(6), 八 a(6), 以 a(6), 哀 a(5), 艶 a(5), 臨 a(5), 七 a(5), 尔 a(5), 浅 v1(5)

数詞が含まれることを除けば、延べ字数からみてもこれらは極めて一般的な文字種であり、何故小玉篇に掲出されなかったのであろうか。

色葉字集と小玉篇に限ってみた場合、共通する 1928 文字種 (A+C 群) は色葉字集全体の 2010 文字種の 95.9% を占めているが、小玉篇は単漢字掲出方式であり、これと同じくするのは色葉字集のいろは立て各項の前半部分である。ここで、はじめに三部としてとらえた全体の構成を拡張すると、以下の如くなる。

	部立て	引き方	掲出方法
本篇	いろは	音引き	熟字
色葉字集 (単漢字部分)	いろは	訓引き	単漢字
色葉字集 (熟字部分)	いろは	訓引き	熟字
小玉篇	部首	部首引き (右傍訓は音)	単漢字

ここで色葉字集の単漢字掲出部分と熟字掲出部分とに掲出された文字種を確認すると以下の如くである。

	a	b	c
色葉字集 (単漢字掲出部分)	○	○	×
色葉字集 (熟字掲出部分)	○	×	○
異なり字数	900	1025	85

即ち、単漢字掲出部分が 1925 文字種 (a+b 群)、熟字掲出部分が 985 文字種 (a+c 群) であり、共に掲出される文字種は 900 文字種 (a 群) ある。したがって色葉字集内部でみた場合、熟字掲出部分にのみ掲出される文字種は 85 文字種 (c 群) と少なく、反対に単漢字掲出部分のみに掲出される文字種は 1025 文字種 (b 群) と多い。

以上をふまえて小玉篇と色葉字集の単漢字掲出部分とを比較する。

	a'	b'	c'
色葉字集 (単漢字掲出部分)	○	○	×
小玉篇	○	×	○
異なり字数	1870	55	217

以上の如く、小玉篇と色葉字集の単漢字掲出部分に共通する文字種は 1870(a' 群) 文字種あり、色葉字集の単漢字掲出部分の 97.1% である。単漢字掲出部分に掲出された文字種は、掲出形式上対応する小玉篇に殆どが掲出されているとも言えるが、掲出されない 55 文字種 (b' 群) の存在は、小玉篇が色葉字集の単漢字掲出部分をすべて包含するわけではないことを示している。この文字種は以下のとおりである。

長 a(11), 面 a(8), 朝 a(6), 王 a(5), 以 a(5), 弟 v1(5), 毒 a(4), 半 a(4), 夢 a(3), 旦 a(3), 壺

¹² 土井忠生前掲書 (新版)168 頁を参照。

v1(3), 艱 a(3), 良 a(3), 形 v1(3), 浅 v1(3), 粉 a(3), 比 a(2), 匠 a(2), 尔 a(2), 踏 a(2), 双 a(2), 疑 v1(2), 豕 a(2), 亭 a(2), 幾 a(2), 也 a(2), 魂 v1(2), 爰 a(2), 弊 a(1), 區 a(1), 裸 a(1), 画 a(1), 民 a(1), 吏 a(1), 袞 a(1), 耕 a(1), 館 a(1), 執 v1(1), 沾 a(1), 游 v1(1), 茂 a(1), 危 a(1), 斃 a(1), 亡 a(1), 鍛 a(1), 閭 a(1), 魁 v1(1), 充 a(1), 臨 a(1), 副 a(1), 植 a(1), 叛 a(1), 隕 v1(1), 登 a(1)

特徴的なのは、これらの文字種のなかには、小玉篇に対応する部首を持たない文字種が少なからずあるということである。配属に迷った末捨て置いたということであろうか。もっとも、小玉篇末尾の「類少字」には、特定の部首に分類されない文字種が多数掲出されており、ここに掲出すること自体に抵抗は少なかった筈であるから、やはり掲出ししない理由がよく分からない。

また、小玉篇と色葉字集の熟字掲出部分を比較した結果は以下の如くである。

	a"	b"	c"
色葉字集 (熟字掲出部分)	○	○	×
小玉篇	○	×	○
異なり字数	930	55	1157

色葉字集の熟字掲出部分に掲出された文字種が 985 字種 (a" 群 + b" 群) と少ないため、小玉篇と共通する文字種は 930 文字種 (a" 群) にとどまるが、このなかには、色葉字集の単漢字掲出部分には掲出されない文字種も含まれている。

屋 a(11), 羅 a(5), 里 a(5), 杜 a(5), 之 a(4), 討 a(4), 搔 a(4), 蛤 a(4), 桶 a(4), 紺 a(4), 蒲 a(4), 柑 a(3), 郎 a(3), 餌 a(3), 共 a(3), 貝 a(3), 寸 a(3), 房 a(3), 刳 a(3), 摩 a(3), 杉 v1(3), 箇 v1(3), 岡 v1(2), 茄 a(2), 馱 a(2), 齋 a(2), 螺 a(2), 婆 a(2), 洛 a(2), 飛 a(2), 噌 a(2), 割 a(2), 鮑 a(2), 徒 a(2), 卓 a(2), 伯 a(2), 縫 a(2), 漬 a(2), 爵 a(2), 濁 a(2), 昇 a(2), 菊 a(2), 拈 a(2), 茸 v1(2), 暴 a(2), 憂 a(2), 襜 v1(2), 櫃 a(2), 叔 a(2), 点 a(2), 蒔 v1(2), 搯 a(2), 炉 a(2), 形 a(2), 俟 a(2), 他 a(2), 卯 a(2), 而 a(2)

小玉篇は掲出形式を同じくする色葉字集の単漢字掲出部分に限らず、重要と考えられる文字種を採録していることになるだろう。

参考までに、色葉字集の熟字掲出部分に掲出され、単漢字掲出部分と小玉篇に掲出されない文字種を挙げれば以下の如くである。

百 a(10), 五 a(9), 六 a(6), 十 a(6), 一 a(6), 四 a(5), 千 a(4), 八 a(4), 二 a(4), 三 a(3), 暴 v1(3), 斐 a(2), 七 a(2), 召 a(2), 麵 a(2), 斗 a(2), 柴 a(1), 踏 v1(1), 包 a(1), 潰 a(1), 棄 a(1), 忤 a(1), 詰 a(1), 茹 a(1), 祢 a(1), 巳 a(1)

明らかに、数詞が上位を占めている。

しかし先にみたとおり、本篇に掲出され色葉字集に掲出されなかったが小玉篇に掲出された文字種が 47 文字種存する一方で、小玉篇のみに掲出されない文字種も 64 文字種あり、しかもこの文字種は延べ字数が 607 字数と多く、繰り返し掲出される基本的な文字種である。さらに小玉篇のみに掲出された文字種が 112 文字種あることは、小玉篇編集時に増補した結果と考えられようが、本篇及び色葉字集を完全に包含するには至っていないのである。

ここで、実用性という観点から、以上の如き文字種の掲出状況について考えてみたい。

想定される使用法は、本篇と色葉字集の序に述べてある如く、音が分かるが訓が分からない、もしくは訓が分かるが音が分からない、という場合である。さらに小玉篇の序に述べてあるとおり、音訓が分からないが形は分かる、という場合である。しかし、文字の形については大概明らかであり、小玉篇の部立てが部首分類になっている以上、目的の文字種に到達できない危惧は少ないのではないか。ひとたび目的の文字種に到達できれば、そこには音訓が併記されているので、本篇や色葉字集にこれを求めることも容易であるし、小玉篇独自の増補分についても想定される熟字はもとと少ないので大きな問題は無いのである。

ここで問題となるのは、形から引けない文字種である。落葉集には、こうした文字種が 95 文字種あることは既に指摘したとおりである。ところが、このうち 64 文字種までは本篇と色葉字集に

共通しており、また延べ字数が他に比べて多い基本的な文字種が数多く含まれることを考慮する
 なら、この基本的な文字種の音調の両方が不明であるという事態は、それほど頻繁には無かった
 のではないだろうか。そう考えるなら、残りの 31 文字種が、本篇もしくは色葉字集のみに掲出さ
 れ、音調どちらか一方からしか(形からも)これを求め得ない文字種になっている。この 31 文字種
 も既にみたとおり様々の要因によって減少する性質のものであるなら、実用上、落葉集に掲出さ
 れていながらこれを求め難い文字種は非常に少ないということになるだろう。

掲出文字種という観点からみて、小玉篇は本篇と色葉字集を整理し増補するかたちで成立した
 というよりは、本篇と色葉字集を編集する段階に想定される文字種の集合から直接成立したと思
 われる。つまり、本篇と色葉字集を併せた既出の字書に新たに對置することを意図したのではな
 く、これに併せて相補う関係になっていると考えられるのである。

3 JIS 漢字との比較

3.1 落葉集と JIS 漢字とを比較する

落葉集は、実用性を重んじて編集された字書である。したがって掲出される文字種は、当代に
 於ける一般的な文字種を中心に構成されていると思われるが、この文字種は現代の JIS 漢字とど
 のような相違があるだろうか。これらの文字種の相違をみることで、中世末期から現代に至る実
 用的な文字種の変容を解明する手がかりになると期待されよう。

3.2 第一・第二水準

以下は、落葉集を第一・第二水準の JIS 漢字¹³を用いて電子テキスト化する際に明らかとなった
 内容である。はじめに、落葉集の各部が第一・第二水準の JIS 漢字によってどれだけ表記可能かを
 検討する。

	表記可能	異字体として表記可能	表記不可能	計
本篇	1701	98	6	1805
色葉字集	1888	116	6	2010
小玉篇	1962	114	11	2087
全体	2042	128	12	2182

第一・第二水準の JIS 漢字で表記可能であり、且つ字体も一致する文字種は 2042 文字種、全体
 2182 文字種の 93.6%に達する。第一・第二水準の JIS 漢字が約 6300 文字種であることを考慮して
 も、この一致の度合いは相当に高いものであると考えられる。

一方、第一・第二水準の JIS 漢字で表記可能であるが、字体が一致しない文字種は 128 文字種、
 全体の 5.9%である。以下に、すべての文字種を画像として示す¹⁴。

痛	唾 v1[22297]	或 v1[11552]	吳	異 v1[50841]	淫	淫 v1[18065]	陰	陰 v1[41735]	
荒	瓜 v1[30827]	穀	穀 v1[xxxxx]	衛	衛 v1[xxxxx]	厭	厭 v1[56475]	罌	罌 v1[50763]
總	禍 v1[34637]	箇	箇 v1[75154]	嘩	嘩 v1[54627]	臥	臥 v1[02808]	塊	塊 v1[xxxxx]
魁	魁 v1[xxxxx]	界	界 v1[xxxxx]	喜	喜 v1[79173]	貴	貴 v1[xxxxx]	宜	宜 v1[50003]
疑	疑 v1[79077]	拳	拳 v1[51028]	恐	恐 v1[10553]	恭	恭 v1[58063]	謹	謹 v1[79161]
具	具 v1[77230]	噴	噴 v1[44022]	桑	桑 v1[14685]	形	形 v1[66152]	鴉	鴉 v1[42124]

¹³ JIS X 0208:1997「7 ビット及び 8 ビットの 2 バイト情報交換用符号化漢字集」を指す。

¹⁴ 画像化する文字種は、基本的に落葉集内に於ける初出位置のものを用いる。

蓋 兼 v[19166], 冤 憲 v[xxxxx], 該 諺 v[xxxxx], 饒 詩 v[xxxxx], 功 功 v[01876],
 網 網 v[67045], 骨 骨 v[84157], 魂 魂 v[xxxxx], 言 最 v[50810], 戔 戔 v[11568],
 堺 堺 v[xxxxx], 殺 殺 v[50828], 參 參 v[xxxxx], 算 算 v[74560], 時 時 v[13772],
 蒔 蒔 v[51876], 鹿 鹿 v[50907], 執 執 v[20246], 煮 煮 v[19187], 寂 寂 v[66429],
 州 州 v[50765], 熟 熟 v[19596], 初 初 v[xxxxx], 所 所 v[13549], 將 將 v[07437],
 床 床 v[xxxxx], 燭 燭 v[19017], 森 森 v[50816], 塵 塵 v[32212], 垂 垂 v[71303],
 睡 睡 v[xxxxx], 杉 杉 v[50016], 勢 勢 v[50735], 淺 淺 v[xxxxx], 煎 煎 v[50835],
 鼠 鼠 v[xxxxx], 奏 奏 v[xxxxx], 想 想 v[xxxxx], 足 足 v[03318], 墮 墮 v[xxxxx],
 第 第 v[50687], 濁 濁 v[51794], 兆 兆 v[76670], 龍 龍 v[xxxxx], 影 影 v[xxxxx],
 壺 壺 v[50747], 低 低 v[00419], 弟 弟 v[xxxxx], 泥 泥 v[04981], 敵 敵 v[55015],
 踏 踏 v[xxxxx], 督 督 v[50846], 熱 熱 v[51871], 卑 卑 v[02379], 美 美 v[50864],
 彦 彦 v[xxxxx], 膝 膝 v[66435], 畢 畢 v[50842], 茸 茸 v[xxxxx], 糞 糞 v[xxxxx],
 壁 壁 v[xxxxx], 慕 慕 v[xxxxx], 磨 磨 v[xxxxx], 暴 暴 v[xxxxx], 幽 幽 v[72161],
 幼 幼 v[01877], 翼 翼 v[xxxxx], 翼 翼 v[28627], 旅 旅 v[12065], 靈 靈 v[66349],
 弄 弄 v[72229], 脇 脇 v[86351], 僉 僉 v[50933], 呵 呵 v[50740], 啞 啞 v[xxxxx],
 嘖 嘖 v[53255], 毀 毀 v[58203], 婢 婢 v[xxxxx], 婢 婢 v[xxxxx], 悒 悒 v[10576],
 挈 挈 v[xxxxx], 槐 槐 v[xxxxx], 榴 榴 v[79401], 敷 敷 v[51274], 渤 渤 v[17467],
 游 游 v[17652], 濫 濫 v[xxxxx], 膜 膜 v[54626], 礦 礦 v[24487], 纈 纈 v[50862],
 襠 襠 v[53907], 驅 驅 v[79694], 賤 賤 v[xxxxx], 辯 辯 v[xxxxx], 驕 驕 v[11201],
 驢 驢 v[44616], 鰐 鰐 v[52696], 龍 龍 v[xxxxx]

これらのうち、下線を付した 82 文字種は三部に共通して掲出されており、落葉集に於いては基本的な文字種であると考えられる。但し、略体によって変形された文字種や、誤解によると思われる文字種については JIS 漢字では表記できないのは当然であるから、これを異字体として JIS 漢字で表記するのにそれほど抵抗がない場合も少なくない。

一方、第一・第二水準の JIS 漢字で表記できない文字種は 12 文字種、全体の 0.5% である。以下に、すべての文字種を画像として示す。

冂 n[01507], 陪 n[05095], 怙 [10451], 辰 n[11742], 怙 n[14512], 𠂔 n[22015],
 𠂔 n[22359], 𠂔 n[29175], 𠂔 n[35241], 𠂔 n[38097], 𠂔 n[38702], 𠂔 n[39974]

これらのうち、下線を付した 4 文字種は三部に共通して掲出されており、落葉集に於いては基本的な文字種であると考えられる。

また、落葉集の三部に共通する基本的な文字種についてみれば、共通する 1681 文字種のうち JIS 漢字によって 1593 文字種が表記可能である。残り 83 文字種は異字体として表記可能であり、5 文

字種は表記が不可能である。

参考までに、延べ字数についても示しておく。

	表記可能	異字体として表記可能	表記不可能	計
本篇	13236	631	7	13874
色葉字集	4539	229	6	4774
小玉篇	2257	135	12	2404
全体	20032	995	25	21052

延べ総数では表記可能な文字種が 20032 字数で全体 21052 字数の 95.2%に達する。表記するが字体が異なる字数は 995 字数で全体の 4.7%，表記できない字数は 25 字数で 0.1%である。

以上にみた如く、落葉集に於いて基本的な文字種は大部分第一・第二水準の JIS 漢字で表記可能である。

3.3 JIS 第三・第四水準

以上、第一・第二水準の JIS 漢字によって落葉集がどれだけ表記可能なのかを検討してみたが、第三・第四水準の JIS 漢字¹⁵を考慮することでこの表記率はどうか変化するだろうか。

まず、第一・第二水準では表記可能であっても字体が一致しなかった文字種について、新たに字体も一致するようになった文字種が 26 文字種ある。以下に該当するすべての文字種を挙げる。左から、落葉集中の文字画像、第三・第四水準の規格表文字画像、同面区点番号、電子テキスト内表記、である。

𪛗 𪛗 1-14-3 (喜 v[79173]), 𪛗 𪛗 1-14-52 (宜 v[50003]), 𪛗 𪛗 1-14-59 (功 v[01876]),
𪛗 𪛗 1-84-61 (驕 v[11201]), 𪛗 𪛗 1-85-62 (桑 v[14685]), 𪛗 𪛗 1-90-73 (瓜 v[30827]),
𪛗 𪛗 2-3-40 (勢 v[50735]), 𪛗 𪛗 2-87-4 (塵 v[32212]), 𪛗 𪛗 2-5-31 (靈 v[66349]),
𪛗 𪛗 2-80-38 (厭 v[56475]), 𪛗 𪛗 1-88-49 (唾 v[22297]), 𪛗 𪛗 2-88-54 (謳 v[79694]),
𪛗 𪛗 2-91-70 (陰 v[41735]), 𪛗 𪛗 2-91-81 (鷄 v[42124]), 𪛗 𪛗 2-92-45 (噴 v[44022]),
𪛗 𪛗 2-8-3 (最 v[50810]), 𪛗 𪛗 2-3-52 (臥 v[02808]), 𪛗 𪛗 2-94-51 (鹿 v[50907]),
𪛗 𪛗 1-85-48 (杉 v[50016]), 𪛗 𪛗 1-87-52 (煮 v[19187]), 𪛗 𪛗 2-3-87 (嘩 v[54627]),
𪛗 𪛗 2-82-56 (礦 v[24487]), 𪛗 𪛗 2-84-75 (岡 v[50763]), 𪛗 𪛗 2-85-30 (脇 v[86351]),
𪛗 𪛗 2-92-80 (驢 v[44616]), 𪛗 𪛗 2-80-29 (執 v[20246])

128 文字種中の 26 文字種であるから、残り 102 文字種は第三・第四水準を導入しても異字体として表記することになる。しかしこれは先に指摘した如く略字体が少なからず含まれるのが原因である。

また、第一・第二水準では表記できない 12 文字種について、新たに表記可能になった文字種が 10 文字種ある。以下に該当するすべての文字種を挙げる。

𪛗 𪛗 2-12-39 (𪛗 n[10451]), 𪛗 𪛗 1-85-51 (𪛗 n[14512]), 𪛗 𪛗 1-88-52 (𪛗 n[22359]),
𪛗 𪛗 2-85-14 (𪛗 n[29175]), 𪛗 𪛗 2-12-86 (𪛗 n[11742]), 𪛗 𪛗 1-88-44 (𪛗 n[22015]),
𪛗 𪛗 1-91-94 (𪛗 n[35241]), 𪛗 𪛗 2-89-54 (𪛗 n[38097]), 𪛗 𪛗 2-89-74 (𪛗 n[38702]),

¹⁵ JIS X 0213:2000 「7ビット及び8ビットの2バイト情報交換用符号化拡張漢字集合」を指す。



醞 1-92-88 (n[39974])

さらに、第三・第四水準によって新たに異字体として表記可能になった文字種が 1 文字種ある。



冃 2-3-9 (n[01507])

以上によって新たに 36 文字種が表記可能となり、落葉集に収録される 2182 文字種のうち、2078 文字種 (95.2%) までも表記可能である。異字体も含めれば 2181 文字種までも表記する。

表記できないのは以下の 1 文字種である。



𠂔 n[05095]

これについては落葉集に於いては基本的な文字種だと思われるが、JIS 漢字では表記不可能である。

以上にみた如く、第一・第二水準の JIS 漢字により掲出文字種の大半を表記可能であり、第三・第四水準の導入により表記率は確実に上昇する。JIS 漢字の表現力は、中世末期の落葉集に於いても有効であり、実用的な文字種に大きな相違がないことが確認される。

4 おわりに

以上をまとめる。

- 掲出文字種について異なり文字種からみると、1805 文字種の本篇が最小であり、2010 文字種の色葉字集を中間として、2087 文字種の小玉篇が最大であるが、小玉篇は本篇や色葉字集の掲出字をすべて掲出するわけではなく、基本的と思われる文字種を掲出しないことがある。小玉篇による本篇・色葉字集の増補という性質は疑い無いとしても、小玉篇は本篇や色葉字集をもとに新たにこれを整理し増補するかたちで成立したというよりは、本篇と色葉字集を編集する段階に想定される文字種の集合体から直接成立し、本篇・色葉字集に併せて相補う関係にあると考えられる。
- 実用性を重んじて編集された落葉集は、第一・第二水準の JIS 漢字によって異なり文字種で 2042 文字種 (93.6%) ままで表記可能であり、さらに第三・第四水準の JIS 漢字により新たに 36 文字種を上乗せして 2078 文字種 (95.2%) が表記可能になる。またこれに異字体として表記可能な 103 文字種を含めれば 2181 文字種 (99.95%) にも達する。JIS 漢字の表現力は落葉集に於いても有効であり、実用的な文字種に大きな相違がないことが確認される。

参考文献

- [1] 土井忠生『吉利支丹語學の研究』靖文社 1942
- [2] 土井忠生『吉利支丹語學の研究新版』三省堂 1971
- [3] 森田武 1953「落葉集本篇の組織について」『国語学』13-14 (同「室町時代語論攷」三省堂 1985 所収)
- [4] 山田俊雄 1970「落葉集小玉篇に見える漢文字体認識の一端」『国語学』84
- [5] 小島幸枝『耶蘇会板落葉集総索引』笠間書院 1978
- [6] 豊島正之『キリシタン版ぎやどべかどる本文・索引』清文堂 1987
- [7] 拙稿 2002「キリシタン文献における字体・字形の認識について——落葉集を例として——」『古辞書と JIS 漢字』第 5 号, 池田証寿編

注：本研究は，平成 13 年度科学研究費奨励研究 (A)「易林本節用集と JIS 漢字の漢字字体について」(代表者：白井純) による研究成果の一部である。

注：本文中の画像は，小島幸枝『耶蘇会板落葉集総索引』笠間書院 1978 所収のイエズス会ローマ本部文書館蔵本影印をスキャンして用いた。画像掲載の御許可をいただいた笠間書院に謝意を表す。

(しらい じゅん・北海道大学助手)